

日本語教科書に見られる調整行動のディスコース分析 (プロジェクト A) 木野 緑

1. はじめに

現在、多くのコミュニケーションのための教材として編集された日本語教科書があるが、果たしてどのくらい真にコミュニケーションの習得を目指して作成されているだろうか。日本語教科書に見られる調整行動のディスコースを分析することにより、それらを解明していきたい。

接触場面での調整行動を分析することによって、参加者がどのような発話交換をしながら問題を解決していくかを知ることができる。日本語学習者の調整パターンを知り、それを教科書で紹介し、尚且つそれは学習者の習得のストラテジーに生かされなければならない。宮崎(2002)は現在の意味交渉研究でなされている研究成果が日本語教育に反映されていない、という問題点を提起している。現在新しい教科書が急増している中で、主にコミュニケーションのための教材として編集された教科書の調整行動のディスコースを分析して、意味交渉による調整行動がどの程度導入されているかを調査してみる。その結果を踏まえて、現在使用されている教科書のねらいとするものを再度明らかにし、何が十分でないのか、今後どのように教科書を作成していくべきか、結果的にはそれがどう日本語教育に生かされるのかを考察したい。

2. これまでの日本語教科書分析

これまでも日本語教科書の内容についてさまざまな分析・批判等が行われてきている。いくつか取り上げてみる。

ラオハブラナキット(1995)は、「断り」に焦点を当て、日本語教科書での会話と実際の電話での会話とを比較分析している。実際の会話では、相手との関係が断りの構造に影響してくるが、日本語教科書における「断り」の会話は状況が十分に設定されていない。実際場面では、はっきりした理由がなくしかも「時間的・能力的に可能」だが、断るというケースがある。しかし、教科書ではほとんど扱われていない。実際場面では「情報要求」をしたり、少しずつ否定的な態度を表わしたりする「断り」のストラテジーがあるが、それらは扱われていない、と批判している。

永山(1996)は、コミュニケーション能力が十分でない日本語学習者にとって、他者との意志疎通が破綻する可能性は高く、破綻を修復する、repair の方略の意義は大きいと主張。コミュニケーション・ストラテジーを扱っている教科書では、情報交換の達成に主眼が置かれ、相手に尋ねる点を明示した「聞き返し」は例示されてはいるが、それだけでは不十分である。情報交換を超えた相互作用という角度からも「聞き返し」を含めて repair の方略を再考察する必要があると提言している。

真嶋（1999）は、「ちょっと」の意味・用法に焦点をあて、日本語教科書にその主たる用法が導入されているかどうか調査している。「ちょっと」の意味・用法は実際の会話の中で、依頼や呼びかけ、許可やその断りなど言語行動の広い範囲での社会言語学的に極めて重要な働きをしているが、コミュニケーション能力の習得を目指す教科書の中には、その目標が教科書の内容に反映されていないものがあると指摘している。

3. 調整行動の観点から分析した結果（添付資料参照）

実際場面で見られる調整行動がどのくらい、現在使われている日本語教科書の会話例に導入されているか、という観点で幾つかの日本語教科書を分析してみる。いくつかの日本語教科書を取り上げ、そのディスコースを調整行動の観点から分析した結果（資料参照）は以下の通りである（表1～3）。

表1. 日本語教科書に見られる調整行動の分析結果（添付資料参照）

- 調整モデル別 -

* 数字は調整行動の回数

教科書名	インプットのための調整		アウトプットのための調整		その他
	他者マーク・ 自己調整	自己マーク・ 自己調整	自己マーク・ 他者調整	他者マーク・ 他者調整	自己マーク / 他者マーク 無調整
日本語でビジネス会話 (1987)	1 1	3	2	6	3 (フラッグ1)
オフィスの会話 (1991)	1	-	-	-	-
Situational Functional Japanese(1991~1992)	3	5	8	6	3 (言語外行動1)
商談のための日本語 (1996)	2	-	-	-	-
なめらか日本語 (1997)	8	3	-	1	1
トピック楽しく学ぼう 日本語会話((1998)	-	-	-	2	1
モジュールで学ぶ よくわかる日本語3 (1998)	2	2	1	1	-

- * 調整行動の回数については、教科書によって提示形式が違い（本文会話、あるいは談話練習用、タスクの文など）、また抜粋する条件もやや違っているので、厳密な回数ではないが、傾向は読み取れる。

<分析対象教科書> （年代順）

日本語でビジネス会話 中級編（1987年） 日米会話学院、日米会話学院、凡人社
 オフィスの日本語（1991年） 高見沢 孟、アルク
 SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE（1991年、1992年）Vol.1～3、
 筑波ランゲージグループ、凡人社
 商談のための日本語（1996年）米田隆介 他、スリーエーネットワーク
 なめらか日本語（1997年） 富阪容子、アルク
 トピック 楽しく学ぼう 日本語会話 中・上級（1998年） 近藤光夫 他、国書刊行会
 モジュールで学ぶ よくわかる日本語 3（1998年） コーベニ・澤子 他、アルク

表2 . 日本語教科書に見られる調整行動の分析結果（添付資料参照）

- 調整フレーム別 -

教科書名	フレーム	
	単純調整	複合調整
日本語でビジネス会話（1987）	6	7
オフィスの日本語（1991）	-	1
Situational Functional Japanese (1991,1992)	8	6
商談のための日本語（1996）	2	-
なめらか日本語（1997）	6	3
トピック 楽しく学ぼう 日本語会話（1998）	-	1
モジュールで学ぶ よくわかる日本語 3（1998）	4	1

表 3 . 日本語教科書に見られる調整行動の分析結果 (添付資料参照)

- 調整行動の種類 -

教科書名	語彙 (意味)	音声 (速さ)	文意 (状況)	動作 (言外)	他の表現
日本語でビジネス会話 (1987)	5	3	7	1	3
オフィスの日本語 (1991)	1	-	-	-	1
Situational Functional Japanese (1991,1992)	4	5	1	3	1
商談のための日本語 (1996)	-	-	4	-	-
なめらか日本語 (1997)	4	-	5	-	-
トピック楽しく学ぼう日本語会話 (1998)	1	-	-	-	-
モジュールで学ぶ よくわかる 日本語 3 (1998)	4	-	-	-	-

* 文意 (状況)・・・文章の意図する内容及び状況に関するもの

* 動作 (言外)・・・実際に動作で示したものの、あるいは、あいづち等言語外のもの

* 他の表現・・・発話内容をダイレクトに表現しないで他の表現を用いているもの

教科書の中に「あいづち」(言語外)の項目が設けられているので回数としては数えていない

4 . 分析結果と考察

上記日本語教科書で扱われているディスコースを調整行動の観点から分析した結果をまとめてみる。

1) コミュニケーション能力の習得を目指す教科書は、他にもたくさんあるがそのディスコースに、調整行動を取り入れて構成してあるものがあまり見られない。全体的に、『Situational Functional Japanese』(1991、1992 Vol. 1～3)はバランスよく、4つのタイプの調整行動が取り入れられている。分析結果の調整回数が他の教科書と比べると多いが、全3冊分であるのでそこは考慮に入れる必要がある。

2) ビジネスパーソン向けの、『日本語でビジネス会話 中級編』は内容的には一般の学習者にも通用するもので、本冊、練習冊、英訳語彙冊と3冊に分かれている。本冊は、「談話型」「本文会話」「類話」「語句の使い方」から構成されており、練習冊に「談話練習」がある。他の教科書と比較すると、調整行動を意識した構成になっている。調整行動モデルとしては「他者マーク・自己調整」「他者マーク・他者調整」などが中心にみられ、単純調整だけでなく、同じ頻度で複合調整も見られる。調整行動も種類も、語彙の意味を問うもの

だけでなく、音声的なものも提示されており、特にセンテンスの意味を問うもの（相互理解を深めるために）も多く見られるのは評価できる。1987 年に出版されたものである。3 冊構成になっているので、学習者に合わせて利用できる。（分析は本冊のみ）

3) 『Situational Functional Japanese』は Vol.1～3 で、初級教科書であるが、コミュニケーション能力の習得を目指したものとして作成してある意図が伺える。特に、アウトプットを意識した「自己マーク・他者調整」「他者マーク・他者調整」が多く、複合調整も多く見られる。『日本語でビジネス会話 中級編』にも見られたが、4 つの調整行動のモデル以外（その他）に、自己/他者マーク・無調整の場合や言語外行動の記載もある。実際場面でよく起こり得るパターンなので、提出回数は十分であるとは言えないが、取り上げられている事実は評価できる。調整行動の内容として、音声に関するものが他の教科書に比べて多い。

4) 『なめらか日本語』は初級終了程度の学習者が話し言葉を学ぶための副教材的なものである。構成と使い方の欄に、「くだけた会話では、性や年齢によって違ったことばを用いることが多い」として、登場人物の性と年齢が書き記してある。社会的役割について考慮してあると言える。構成が3つの部分からなり、それぞれ話し言葉の音声、形態上の特徴、会話の機能と表現方法に分けてある。調整行動の種類を見ると、語彙の意味を問うものと文章の内容を問うものがそれぞれ見られ、作成者の意図が伺われる。言語外行動である「あいづち」の指導項目があり、いろいろなバリエーションが紹介してある。

教科書を使用した感想として、PART 3 は「会話目的」と題してあり、「話を切り出す、反応を見ながら話す、主張を伝える・・・」など、ストラテジーがはっきりしているので会話文を参考にしながら使用できるが、前半部分はテキストを使用する教師の技量が必要になると思われる。つまり、断片的に取り上げてあるので、主たる教科書と併用する場合のタイミングが問われる。

5) 『モジュールで学ぶ よくわかる日本語3』は比較的新しいものである。調整行動も少し見られるが、それに焦点を当てて作成されてはいない。トピックも興味深い内容で、会話文もたくさん提示してあり、会話練習もバリエーションが多く、タイトルからも引きつけられるものがあるが、調整行動の観点から提示された会話文はほとんど見られない。

5. おわりに

日本語教科書に見られる調整行動を分析した結果、ほとんどの教科書、特にコミュニケーションの習得を目的にした教科書でさえ、その取り扱いには十分ではない。川口（1993）は代表的な初級教科書と教師用指導手引書の分析をしている。教師が、学習者にとって、

どれだけ意味のある自然な日本語が提示できるかが問題で、その手引書の充実が必要だとしている。実際、素晴らしい教科書や教材があっても、教師がそれらを使いこなせなければ役に立たないという問題点が残る。誰が教えても簡単に教えられる教師用の手引書があれば、特に新人の教師は助かる。最近、書店で「はじめての人でも教えられる・・・」という日本語教師用の指導書を目にする。懇切丁寧に、一から十までチャート付きである。確かに、それを見ると一度も教えた経験がない人でも大丈夫かもしれない。見れば手順が書いてある。日本語教師養成の立場から見ると重要なことだと思うが、それ以上に、学習者が自立して学習できる教科書の充実を図ることが先決のような気がする。

実際場面での会話をすべて教材に盛り込むことは不可能で、またその必要もないが、接触場面での調整ディスコース分析などの研究が進み、その意義も認められるようになったにも関わらず、研究成果を教科書・教材に取り入れたものがあまり見当たらないというのは問題である。確かに、調整中の発話を文字化すると問題が起こる可能性もある。紙面上の文章は一部完全なものでなくなる。全体の会話の流れを読まず、未完成の箇所だけを読んで学習者が混乱する恐れがあるかも知れないが、そこはタイトルでカバーしたり（たとえば「 が思い出せませんでした。」とか）、メモ書きを添えたり、何か工夫をすることで解決できる。

さて、実際の接触場面で見られる調整行動のパターンを、より充実した形で教科書に導入していくにはどうしたらいいだろうか。まず、第一に進められるべきことは、先の研究でも課題として提起されていた、相互理解を深めるディスコースを教科書に導入することである。2人の対話（日本人と日本語学習者）だけでは、なかなか理解を深めるところまで展開できにくい。それなのに、ほとんどの教科書は2人の会話（対話）で構成されている。どこか一部のセクションで、参加者を3人以上の構成にできないものだろうか。そして、3人の相互関係を明らかにして、3人がお互いに調整行動をしながら会話を進めていく過程を紹介すれば、失敗することをも含めて、参加者がお互いの意見を理解しながら交渉を成立させていくストラテジーを身につけることができる。そういう教科書・教材の作成が急務である。それが実現できてはじめて、新たな問題点も見つかるであろうし、そのことが意味交渉の研究をさらに進めていくことになる。

参考文献

- 宮崎里司 2002 「第二言語習得研究における意味交渉の課題」、『早稲田大学日本語教育研究』、創刊号、71-89 頁
- 宮崎里司 2000 「コミュニケーション調整と調整マーカー：聞き返しの観点から」、『第二言語としての日本語の習得研究』、3号、57-93 頁、第二言語習得研究会
- 真嶋潤子・澤田朱美 1999「日本語初級教科書分析試案：「ちょっと」の意味・用法から」、『日本語・日本文化研究』第9号、大阪外国語大学 日本語講座
- バルバラ・ピッツィコーニ 1997「待遇表現から見た日本語教科書：初級教科書五種の分析と批判」、『くろしお出版
- 永山友子 1996「日本語教科書の会話例と日本語母語話者の実際の会話との比較：音声言語による repair の相互作用の観点から」、『日本語教育』、90号、1-12 頁
- 渡邊亞子 1996「日本語教育基礎研究シリーズ 3 中・上級日本語学習者の談話展開」、『くろしお出版
- カノックワン・ラオハブラナキット 1995「日本語における「断り」：日本語教科書と実際の会話との比較」、『日本語教育』、87号、25-39 頁
- 川口義一 1993「日本語教育と教科書：教師のための教科書」、『日本語学』、12 - 2、22-30 頁
- 迫田久美子・西村浩子 1991「コミュニケーションを重視した受け身文の指導法の研究：教科書分析及び目標言語調査に基づいて」、『日本語教育』、73号、73-91 頁